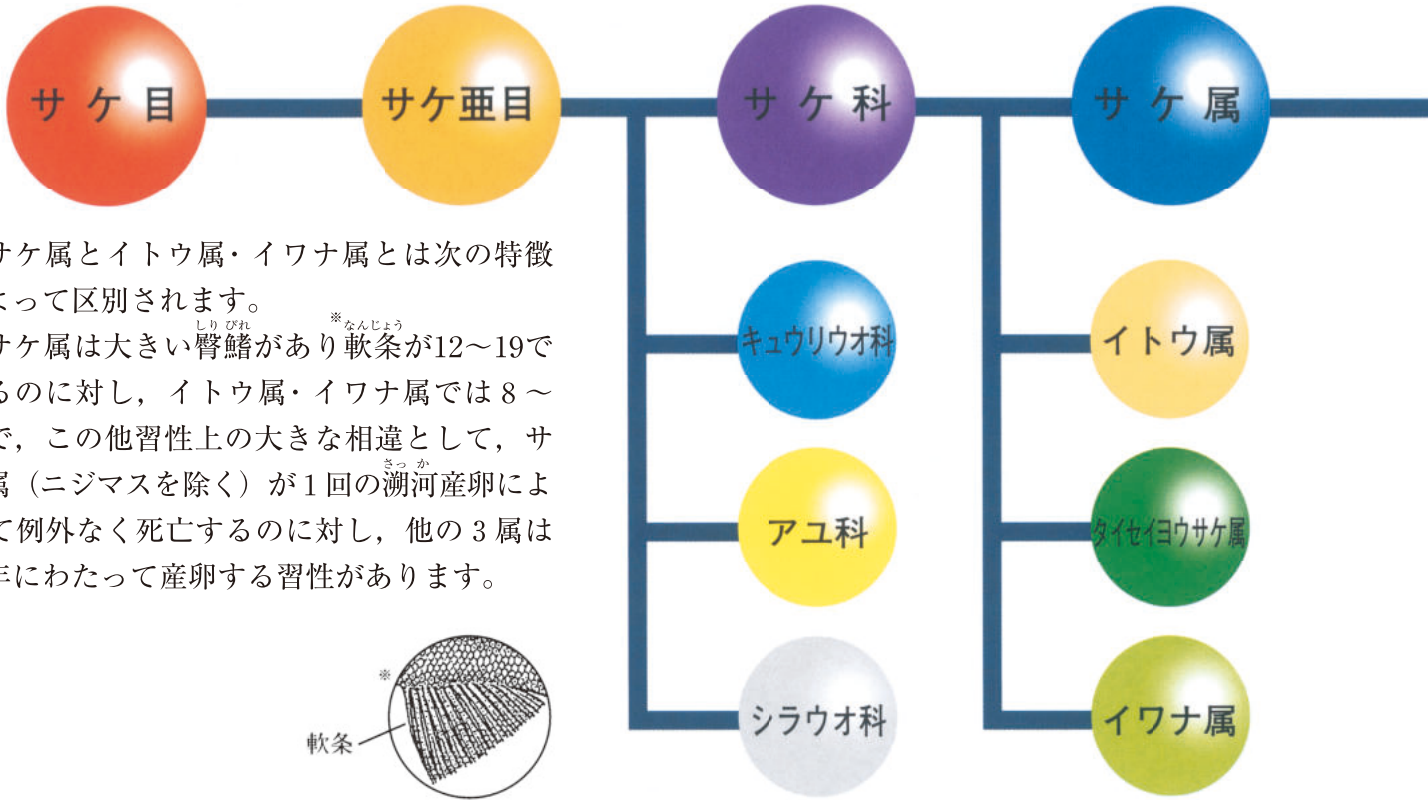
1. サケの種類

サケ・マスは硬骨魚綱のサケ目，サケ亜目のサケ科に属します。

サケ科はサケ（シロザケ）に代表されるサケ属のほか，イトウ属，タイセイヨウサケ属，イワナ属の４属に分かれますが，主に漁業の対象となっているサケ属以外の３属は，遊魚や養殖の対象となっています。

サケ属の中で，サケとマスの呼び名があり，区別が明確でないのは，昔から日本でサケ（シロザケ）以外のものを，マスと言い習わしていたなどの理由によるもので，いずれもサケのりっぱな仲間たちです。



サケ属とイトウ属・イワナ属とは次の特徴によって区別されます。

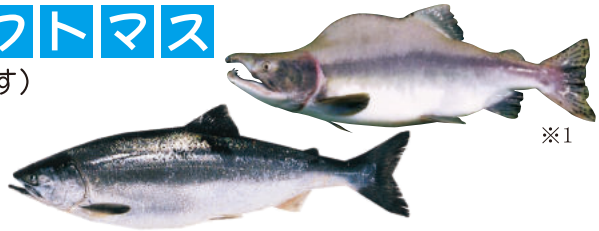
サケ属は大きい臀鰭（しりびれ）があり※軟条（なんじょう）が12～19であるのに対し，イトウ属・イワナ属では８～12で，この他習性上の大きな相違として，サケ属（ニジマスを除く）が１回の遡河（さっか）産卵によって例外なく死亡するのに対し，他の３属は数年にわたって産卵する習性があります。

太平洋サケの特徴

呼び名		主な分布域	年令			成魚の体重(kg)	肉の色
標準和名	河川残留型		淡水	海洋	全期		
カラフトマス	－	ロシア，米国 カナダ，日本	数週間	1.5年	2年	2	桃色
サケ	－	日本，ロシア 米国，カナダ	1～3か月	2～4年	3～5年	4	桜色
ギンザケ	－	ロシア，米国 カナダ	1～3年	1.5年	3～5年	4	紅色
サクラマス	ヤマメ	日本，ロシア	1～2年	1年	3～4年	2	桃色
ベニザケ	ヒメマス	ロシア，米国 カナダ，(日本)	0～3年	2～3年	4～6年	3	紅色
マスノスケ	－	ロシア，米国 カナダ	0～1年	2～4年	3～6年	10	紅色

注1）朝鮮半島の日本海側にもサケ，カラフトマス，サクラマスがいます。
注2）淡水年令には卵の期間や砂利（じゃり）に潜（もぐ）っている期間を含（ふく）めていません。
注3）ベニザケの主な分布域のうち（　）は，ヒメマスのみが生息することを示します。

カラフトマス
（さくります）


※1

日本では主に北海道宗谷岬から納沙布岬の間のオホーツク沿岸の河川にそ上しますが，大川にそ上した例もあります。魚体は小さく，2年で成魚となり，全長は50cmに達します。

サ　ケ
（しろざけ，おおめます）

日本の沿岸河川にそ上するのは，この種類が大部分で，ふ化放流の主要魚種です。お正月の新巻ざけでおなじみで，全長は1mに達します。

ギンザケ
（ぎん，ぎんます）

日本には回遊しませんが，アメリカ・カナダから卵を輸入してふ化し，宮城・岩手県等で海中養殖されています。全長は1mに達します。

サクラマス
（ます）

※1

千葉県以北の太平洋沿岸や日本海の沿岸・沖合に回遊します。サクラマスの河川型はヤマベ（ヤマメ）で雄が多く，降海型（サクラマス）は雌が多くなっています。全長は1mに達します。

ベニザケ
（べに，べにます）

※2

日本には回遊しませんが，陸封型のヒメマス（体長約30cm）がいます。産卵期になると魚体が紅葉（もみじ）のように赤くなるのでこの名があります。全長は90cmに達します。

マスノスケ
（すけます）

北海道の河川に少しそ上します。アメリカ・カナダに多く，スポーツフィッシングの対象として有名です。英名ではキング・サーモンと呼ばれ，サケ科の中で一番大きくなり，全長2mに達します。

※１提供：国立研究開発法人水産研究・教育機構
※２提供：地方独立行政法人北海道立総合研究機構水産研究本部

注1）サケ属には上記のほか，サツキマス・ニジマス等があります。

注2）魚名のうちカタカナは標準和名，ひらがなは当地方の呼称を示します。

注3）サケ科には脂鰭（あぶらびれ）のあることが特徴で，キュウリウオ科・アユ科・シラウオ科等にもあります。

2. サケの人工ふ化放流

日本は，国土がせまく天然の産卵場が限られています。そのうえ開発工事は上流域にまでおよんでいることから，河川環境の変化が著しく，大量かつ安定的にサケを増やすためには集約的なふ化放流事業に頼らなければなりません。

世界各国の200海里規制やサケ・マス資源の母川国帰属主義の定着によって，北洋漁場でのサケ・マスの沖獲りが禁止になったため，人工ふ化放流によるサケの飛躍的な増大をめざしています。

サケのふ化放流には豊富な湧き水が必要なため，ふ化場の多くは町はずれに建てられています。

サケを捕獲してから卵を採り，稚魚を放流するまでの一連の仕事を紹介しましょう。

捕獲

川へのぼった親魚は，張網で誘導し，捕獲器により捕獲します。

採卵

受精

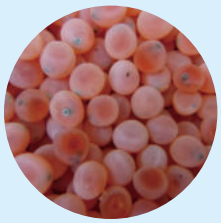
健康な親魚から取り出したやわらかい卵に，オスの精子をかけて受精させます。

受精後，卵に吸水させると，卵膜は固くなり，小さな生命の鼓動が始まります。

ふ化

ふ化室（ふ化槽）

淘汰検卵



発眼

ふ化仔魚

受精した卵はふ化槽へ収容し，発眼するまで卵を管理します。

ふ化槽に入れられた受精卵は8℃の水温で約1か月たつと発眼といって卵に眼があらわれてきます。

発眼後，死んだ卵を取り除く淘汰検卵を行います。

さらに 1 か月たつといよいよ卵膜を破ってふ化が始まります。ふ化したばかりの仔魚はさいのうと呼ばれる栄養の袋をおなかにつけています。

次ページへ

前ページより

飼育

約2か月たつとさいのうも小さくなり，泳ぎ出して餌を食べるようになります。餌を1か月くらい与えられ，体長約5cm，体重約1gになるまで育てられます。

海中飼育

稚魚の一部は，さらに大きな稚魚を作るため海中で飼育され，体長6～8cmになると放流されます。

放流

餌を与えられ，大きく育った稚魚は，川や海の状態に合わせて放流されます。

河川放流

ふ化場から河川放流場所まで稚魚を運搬し，放流します。

海中放流

海中の生簀で飼育した稚魚を生簀網を外し放流します。